

## 1. 登山記録

### 富山県山岳連盟

### '94ガッシャーブルム I 峰 (8,068m) 遠征隊

佐伯尚幸

県岳連3つめの8,000m峰に、カラコルム山脈のチベット・パキスタン国境上の山で、インドとの国境近くのガッシャーブルム I 峰を選び、県内各会のメンバー13名と共に遠征してきた。

本来、山登りは、気の合った者同志、あるいは、クラブのメンバーと共にやるのが理想ではないかと常々思っているが、8,000m峰ともなれば資金や休暇の問題等、解決しなければならぬことが沢山あるので、数年に一度遠征を企画し、参加するチャンスを提供することも連盟の使命であるかもしれない。

このことが、所属各クラブに経験者を生み、また、波及効果としてヒマラヤへの機運を高め、ひいては、山岳への関心があらゆる層に受け入れられることを願うものである。

より困難である未踏ルート<sup>1</sup>の北壁を選び、また、前回同様、酸素補給なし、ハイアルティチュード・ポーターなしとしました。

最近、外国隊も含めルート<sup>2</sup>工作から荷揚げ、酸素補給までハイアルティチュード・ポーターにたよっている遠征隊を見聞きする。しかし、頂に立つために何でもありという登山はすでに過去のものであり、個々の創造力を奪ってしまうことになり、また、そのために山へ持参する荷物量が増え過ぎることは、それだけ山岳環境にも影響することになる。

ベースキャンプから上は、自分達のみ力で、というのが私達の考えである。

近年、一部の隊はこの点で逆行してきているのではないだろうか。

頂に立つために新しいルート<sup>3</sup>を選ぶことは、過去の経験だけではなく、新しいオペレーションを創造していくことになり、これが事前の検討に熱が入り、ひいてはチームのレベルを上げ、結束を固められると思われる。

隊は、6月19日イスラマバードでのブリーフィングを終え、20日早朝、バスでカラコルムヒマラヤの玄関口、スカルドへ向かう。ここで最後の準備を終え、24日スカルドからジープ7台でアスコレへ向かうも道路決壊のため、アスコレ手前のトンガルまで行く。しかし6年前のブロードピーク遠征の時はスカルドからアスコレ迄4日<sup>4</sup>がかりだった。この変わり様は感慨深い。

26日、いよいよキャラバンを開始するが6年の間にルート<sup>5</sup>が整備され、渡渉する箇所が無くなっており、このパキスタンの変わり様は、ツーリズムへの関心の高さからきているのだろうか。

キャラバン途中の森林破壊の元凶である燃料の問題では、従来以上の進展は困難で、リエゾンオフィサーやサードとも話し合い、私達の考え方は理解されたとは思いますが、現地の人達の習慣と文化



ベースキャンプにて

そして、宗教と一体となった価値観の前では、一遠征隊の交渉力では無力であり、息の長い啓蒙の努力と時間が必要であると思われる。

強烈な陽射しと乾燥に苦しめられながらの8日間で、バルトロ氷河を経てアブルツィ氷河の真ん中のモレーン上に、ベースキャンプ(5,100m)を設営したのが7月3日。

6日よりガッシャールム氷河上のアイスフォール帯をルート工作しながら高所順応を兼ねて荷上げ、キャンプ1(5,900m)迄は、巨大なセラックやクレパスが多数あり非常に危険で、ヒドンクレパスには、隊員は何回も転落したが、事前の訓練のおかげで、幸い大きな怪我はなかったものの、だいぶヒヤリとさせられた。

今振り返ってみると、頂上までの全ルートのうち、ベース・キャンプとキャンプ1の間が、いろいろな意味で、今回の登山に一番影響したように思う。

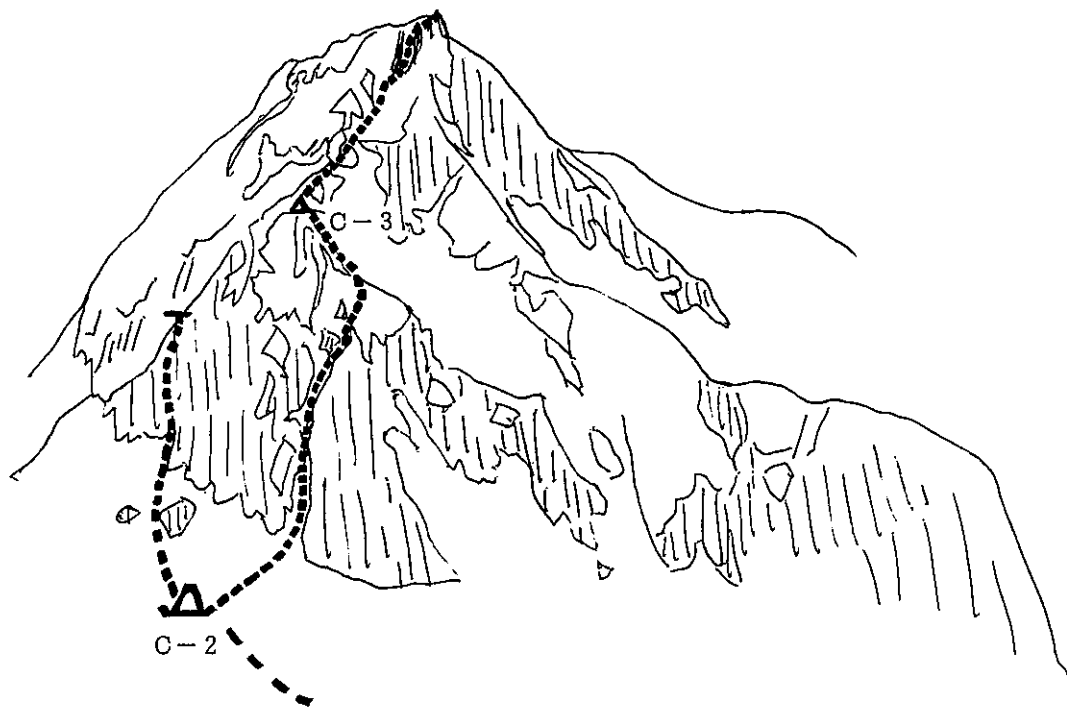
7月6日以降次々にアメリカ隊、スペイン隊、ボスニア隊、アングロ・アメリカン隊、イタリア隊、ブリテッシュ隊がベースキャンプに入り、国際色豊かなテント村が出現した。

キャンプ1迄は、1峰、2峰、3峰ともルートは同じなので、このようなことになり青、赤、黄、緑など、色とりどりのテントの数は100以上はあっただろう。

## 1. 登山記録

Gasherbrum I (8,080m)

North Face

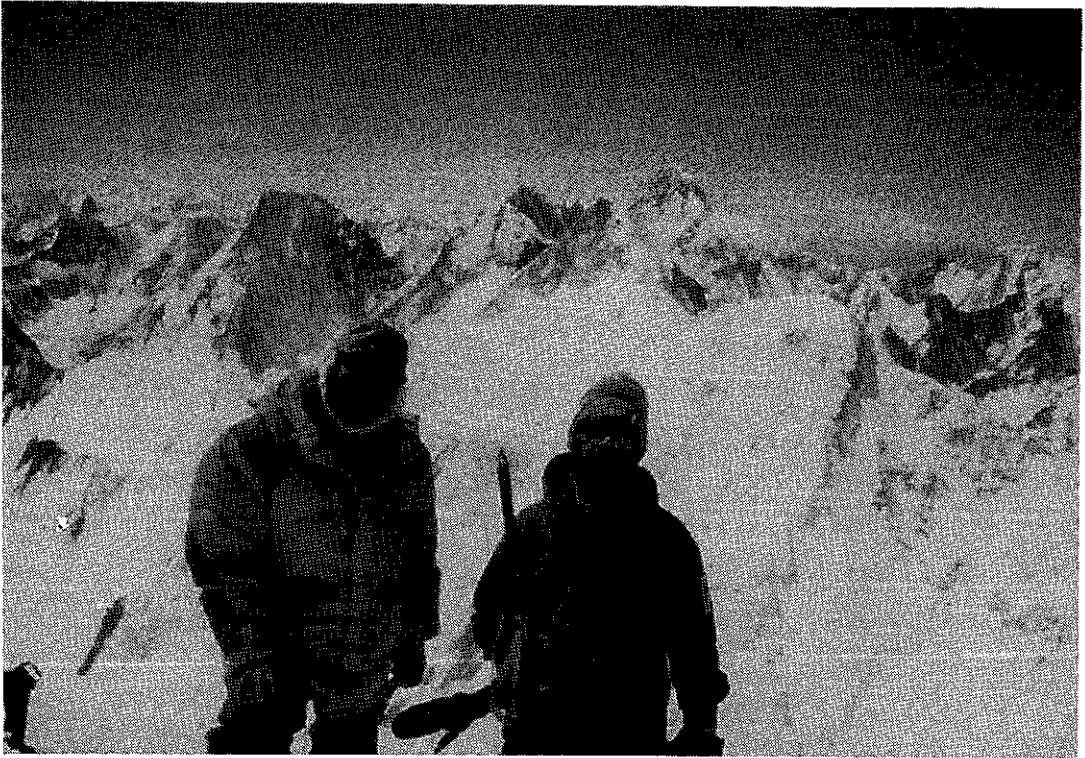


キャンプ2 (6,400m) までは大きなクレバスが幾つかある以外は、雪原を歩くルートでガッシャーブルム・ラの手前 (6,400m) に設営した。

ここからいよいよ北壁未踏ルートに取り付き岸壁帯にルートを延ばすが、岩が思ったよりもろく支点がなかなか取れない、さらに12ピッチ登ったところで、懸垂氷河の崩壊など、非常に危険な場所に長時間さらされるなど、これ以上は無理と判断せざるを得なかったが、北壁未踏ルートからの登頂を、最大の目標にしてきた我々は、危険を承知でこだわるか、通常ルートに切り替えて頂上に立つことを最優先するか重大な岐路にたたされ、早急な決断を迫られた。

日数的な余裕もない中8月5日、後ろ髪引かれる思いで北クローアルにルートを変更キャンプ3 (7,400m) からアタックすることに決め、8月8日キャンプ3 予定地近くまではいり9日キャンプ3に3名入るも、以後11日まで猛吹雪にみまわれ燃料、食料が残り少なく心配したが、12日快晴に恵まれ極寒の中早朝よりアタックを開始、ダイレクトにルートを取る、頂上直下70度の壁を乗り越え、12時半まず谷口が、つづいて1時間半遅れて稲葉が、さらに1時間遅れて佐伯が頂上に立った。

この日アタックのメンバーは15時間の行動でキャンプ3に帰着、キャンプ2からのサポートのメンバーは、不安定な雪上を17時間の行動の後、夜9時にキャンプ2に帰着、頭が下がる。



頂上に立つ谷口・稲葉隊長  
後方の山はK2, ガッシャーブルムⅡ, Ⅲ, 辺峰及びブロードピーク

以後撤収を繰り返し、ほとんど全ての装備をベースキャンプに下ろし、またベースの周辺の過去の隊のゴミも集め、燃えない物（金属、ガラス）は、持ち帰った。

我々規模の遠征隊であれば、過去の経験から30名位のポーターで充分と思われたが過去の隊の重量のある不燃物が、相当多かったせいか40名のポーターが必要だった。

帰りのキャラバンは、ゴンドコロ峠を通り、ヒューズパンーセイシチョウから、フーシェに出て、ジープで1日で8月20日スカルドに到着、ベースキャンプより、4日間であった。

20年前に、何日もかかった、フーシェへの道がたった1日になり、また当時雇ったポーターが、大サダーになっていたり、あるいは、すでに亡くなっていたりと、感慨深いフーシェの地であった。

しかし、地元の人々はバイタリテイに溢れ、山へのアプローチの道を、またトレッカーのための峠の見晴らしの良い道作りなど、人々を受け入れるための環境設備造りに熱心だった。

6月24日ガッシャーブルムⅠ峰を、目指してこのスカルドの町を出発して、約2か月近い月日が流れていた。

尚、持ち帰ったごみはスカルドのK-2モーターに処理を依頼した。

## 1. 登山記録



ベースキャンプとガッシャーブルム I 峰

私自身パキスタンの遠征を4回経験したことになるが、それぞれ思い出が深く、計画し、実行し、それぞれ全員無事に、遠征を終えることができたのは、今思えば奇跡に近いことだったように思えてならない。

共にカラコルムに遠征した仲間の、富山市民病院の水腰英隆さん、芦峯寺の佐伯祐考さん、黒部の高島石盛さん達が、あの世へ逝かれ、現在のカラコルムの変わり様を語り合えないことを思う時痛烈な寂しさを感じる。

今後とも、山の良さや、ヒマラヤの良さを伝えながら山登りを続けたい。

(ガッシャーブルム I 峰登山隊長)